



SYAKUGAN NO SYANA FANBOOK

シラクガンノシヤナファンブック

FOR ADULT ONLY



SYAKUGAN NO SYANA FANBOOK

シヤナ

シヤナ

FOR ADULT ONLY

Incandescent x Deluxe

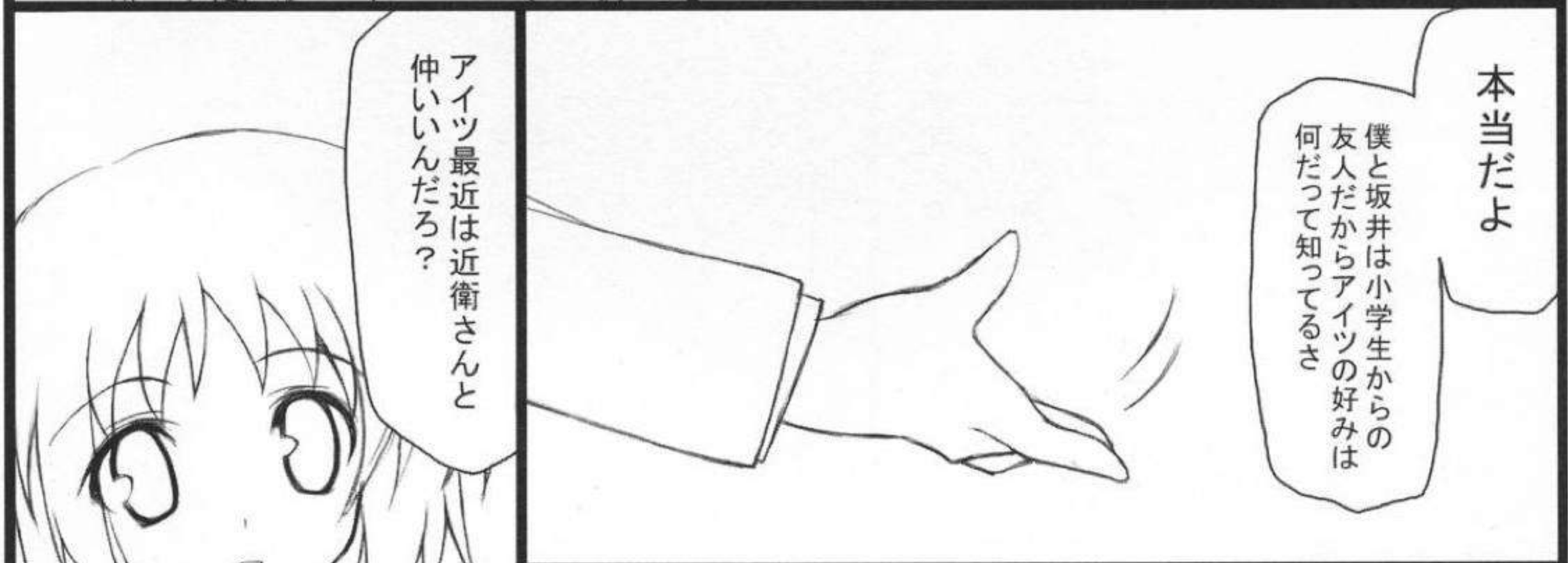


COMIC-----P5 NOVEL-----P19 COLUMN--P28



レッスン？

そんな事で
ホントに女の子
らしくなれるの？



本当だよ

僕と坂井は小学生からの
友人だからアイツの好みは
何だって知ってるさ

アイツ最近は何衛さんと
仲いいんだろ？



シヤナちゃんが坂井の
理想の女の子に
近づけるようレッスン
してあげるよ

このまま何もせず
についていいのかな？

万が一近衛
さんと――

わかった

え？

はや……

そのレッスン受けて
やるって言うてるの

でもシヤナちゃん
小学生みたいな身体だし
キツくて途中で弱音吐い
ちやったりするんじゃない？

ムカツ

強がりをいうのは
止めた方が……

途中で泣き言なんて
言わない！

何だってやって
みせるわよ

そっか
じゃあ――

まずはスカートを
めくって
もらおうかな

はあ！

な、なんで
そんなこと！

シヤナちゃんには
色気が足りなさ過ぎ
るんだよ

何でもやるって
いうのは
やっぱり強がり
だったんだ

ほ、ほら...

これでいいんでしょ？

そっか、なら
やっぱり吉田さん
にでも教えた方が
よさそうだね

じゃ、呼び出して
悪かったね

ちよ、ちよっと
待ちなさいよ！

ズ...





そっか…

んや!?

これって
気持ちいいんだ

かぼ?



いただきます

くちゅ

ふあっ…



トロク…

もう濡れちゃっ
てるじゃん

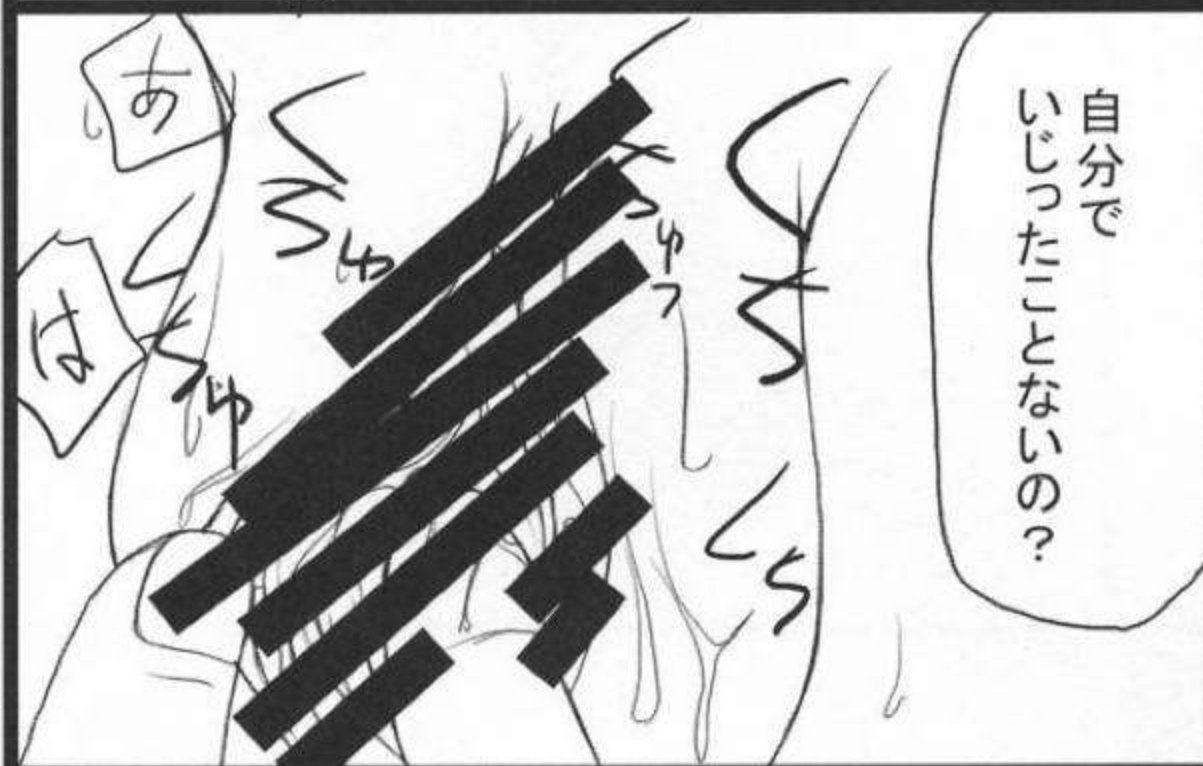


気持ち…
いいよおお…

びん

あぁあぁあぁあぁ…!

はっ…
んあっ♡





しっ
知らないっ

ぶいぶいっ!



じゃ次は僕を
気持ちよくして
もらおうかな

ぐんぐん



ふふ
よくできました

これからは質問には
ちゃんと答えること
いいね

は♡

はま



ほらこれを
舐めるんだ





ほら
ちゃんと後始末
してくれよ

ムい



そうそう
奥に残った精液も
全部吸いだしてね

ちゅー♡



びるるるっ!

ひゃっ!

びん

びん



これが精液…

びるる



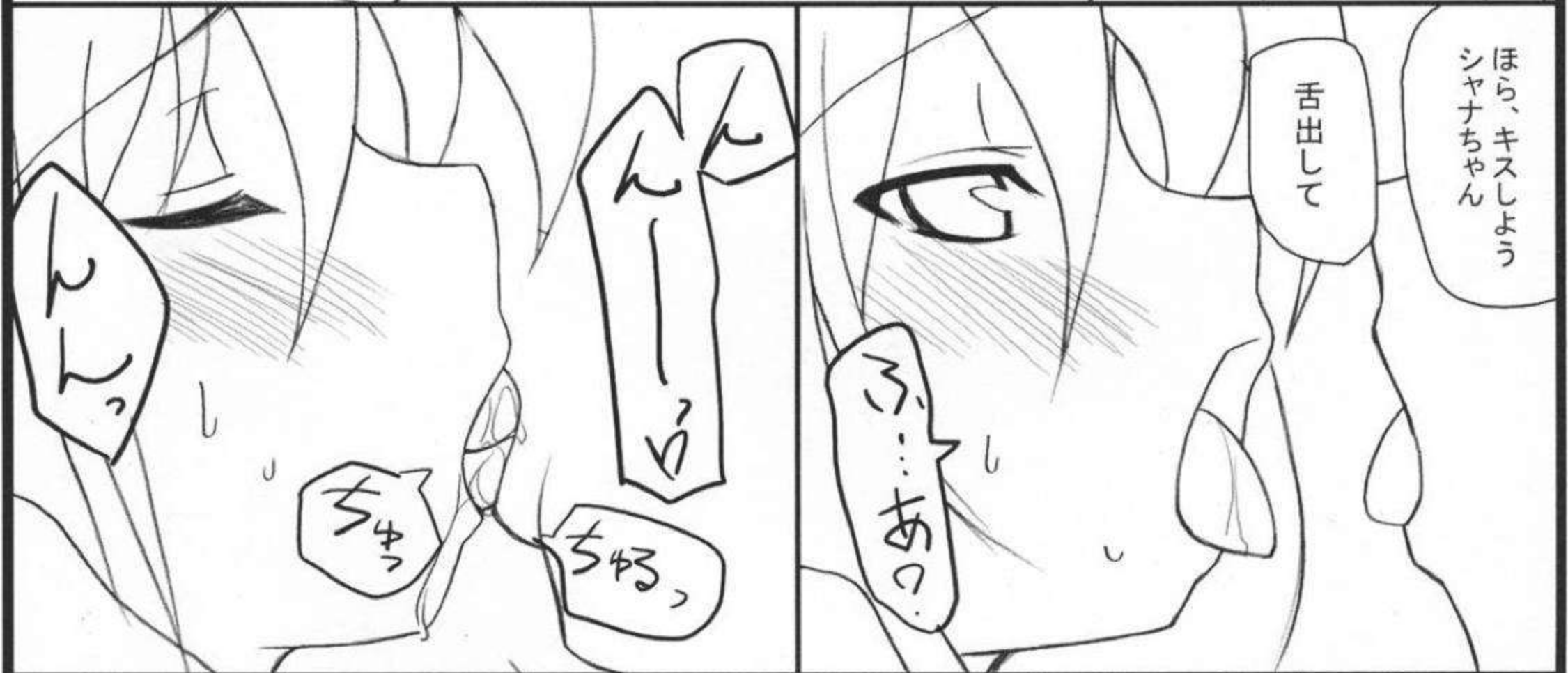
なんだろ…
苦くておいしく
ないけど

舐めると
体の奥が
ジンジンしてくる

ん

ん



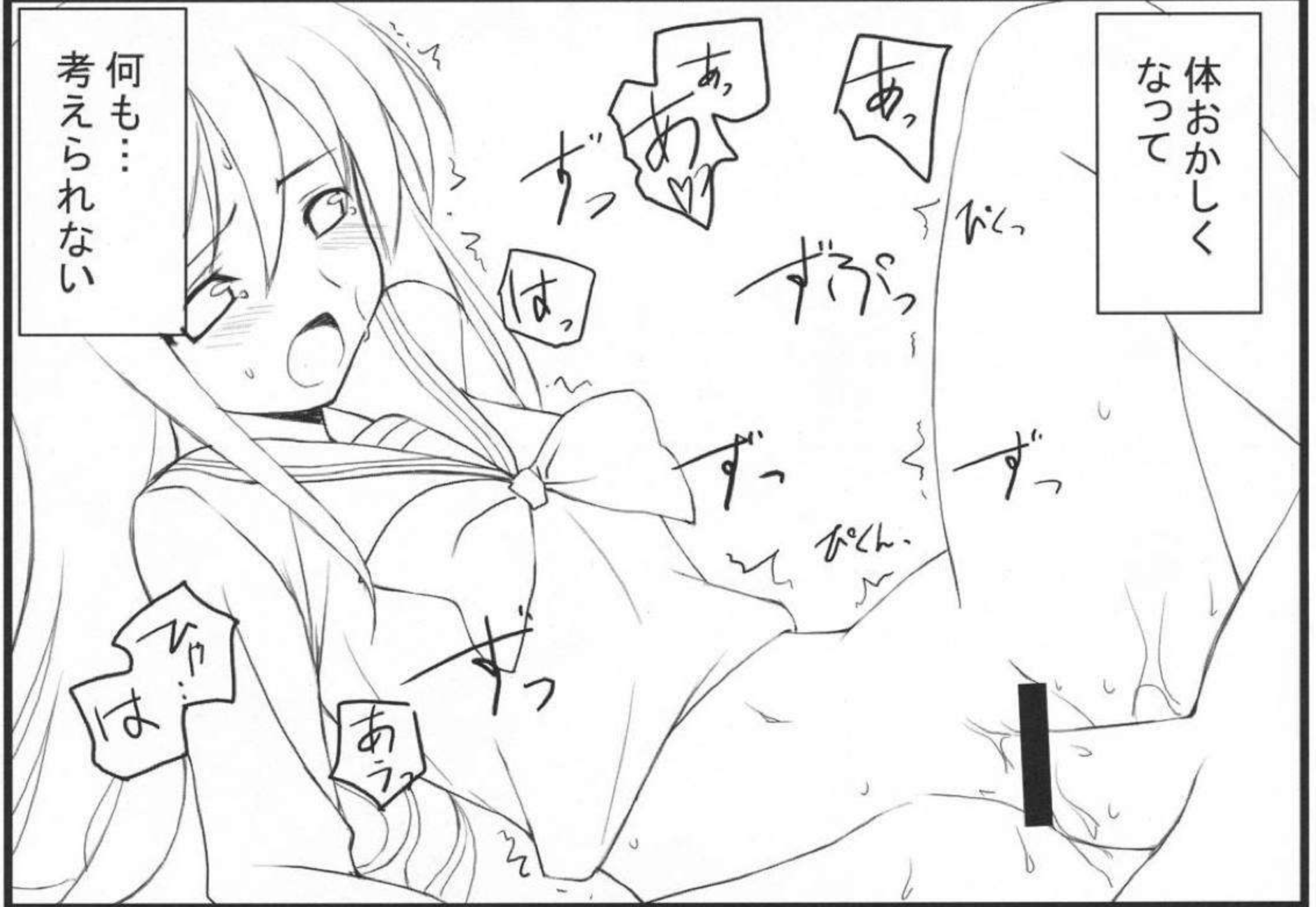




だ...め



何も...
考えられない



体おかしく
なつて



ほら
受け取れっ！

ど
ム
ル
ル
ル
び
び
る

わたしが…

わたしじゃ
なくなっちゃうっ…

びびる
びびる

これから
毎日放課後
ここに来るんだぞ

僕この…
いや坂井好みの女の子
になるまでじつくり
躡けてあげるからね

は
ふあい♡

あ
は
あ♡

わん

びん

囚我 [トラワレ]

坂井悠二が、紅世の徒に捕まって、この城の中に拘束されてから、すでに一週間以上が経過している。

悠二が監禁されているのは、四方をコンクリートの壁で囲まれ、飾り気どころか窓すらないような部屋だった。そこにこぢんまりとしたベッドと、簡易トイレがある。

いわゆる独房である。

「……………」

彼は居心地が悪くて、身じろぎをした。体調面で不都合が起きているわけではない。食事も与えられている。

問題は、悠二と一緒に捕まっている、女性のほうである。

ヴィルヘルミナ・カルメン。

夢幻の冠帯ティアマトーを持つ、フレイムヘイズだ。

シンプルなメイド服を身にまとい、両手を前に組んでいる。身体の真ん中に鉄柱でも仕込んであるんじゃないかと錯覚するほど、きつちりと背筋を伸ばしていた。その様子はまさにメイドそのものの。

シャナと少し似た意志の強そうな瞳が、ギリギリとこちらを見つめている——というよりは睨んでいた。

「あの、カルメンさん大丈夫ですか……？」

「なにがでありますか？」

いつになく素っ気ない態度で、彼女は応じた。

「さっき、外に連れて行かれましたけど、何かあったんですか？」

急に僕から距離を取るようになったから……」

狭い独房の中であるにもかかわらず、彼女は部屋の端のほうで突っ立っていた。

「……あなたの思い過ごしであります」

「そうですね？」

悠二が近寄ろうとすると、ヴィルヘルミナはビクッと、身体を仰け反らせた。

「……カルメルさん？」

「……いえ、なんでも」

ヴィルヘルミナはこう見えてプライドが高い。紅世の徒に捕らえられてしまったことを、恥じているのかと悠二は思っていたが、どうにも様子が変だった。

「……とにかく、待っていていれば、きっとシャナたちが助けに来てくれますから、まず座ってください」

悠二はそう言って、肩に触れると——。

「ひああっっっ！」

ヴィルヘルミナは悲鳴のような声を上げ、背筋を大きく仰け反らせると、突然、悠二にしがみついていた。

「か、カルメルさん？」ヴィルヘルミナの反応に、悠二は目を丸くした。「どうしたんですか？ あれ？ なんか、身体、熱くないですか？」

ヴィルヘルミナから伝わってくる熱量は、尋常じゃなかった。

「やっぱり、あいつに、何かされたんですか？」

肩を掴んで問いかける。そこで悠二は、彼女の目が潤んでいることに気付いた。今までで見たことのない、媚びるような表情だった。

「もう、ダメ……で、あります……」

ヴィルヘルミナは、胸のリボンに手をかけると、一息でそれを

抜いてしまった。

「え、えええっ！」

さらに胸元のボタンを、上から順番にひとつひとつ解いていく。ヴィルヘルミナの乳房は、シヤナとは違ってかなり豊満で、ロケットのようになんか誇らしく前に突きだしている。マージョリー・ドーほどではないものの、これも爆乳と言っても差し支えないほどのサイズだった。さすがフレイムヘイズと呼ぶべきか、鍛えられた身体から盛り上がる柔肉は、単なる脂肪の塊などではなく、土台がしっかりしているため、完璧なラインを描く美巨乳となっていた。ボタンの封印が解かれる度に、乳房が横に広がり、大きくなっているように感じられる。

「いつ？ あ、あの……なにを……」

未だ童貞街道まっしぐらの悠二の視線は、当然のように、その豊かな胸の谷間に吸い寄せられていった。

しかも――。

「カルメルさん、の、ノーブラ……？」

そう思うとついつい視線が、乳房の頂きのほうに集中してしまう。紺色の布地は乳房によって膨らんだ風船のように張り詰め、それとわかる突起が、ぷっくりと浮かび上がっている。その位置は布の端ギリギリ。注意して見ると、開いた胸元から、ほんのりとピンク色の乳輪らしきものが確認できる。見えるか見えないというギリギリのラインは、かえってエロティックで少年の幼い興奮を加速させていく。

「ちよ、ちよつと、どういうことですか……？」

「……紅世の徒に、頭の中を弄くられたので、あります。そのせいで……、オトコが……、すごく……欲しくなっているのであります……」

「……え、ちよつと、それって……」

「きつと、今も、私たちのことを監視……、しているのであります……。こういうのを見せ物にして、楽しんで……」

悔しそうに言いながらも、ヴィルヘルミナの吐息は、どんどん熱く、甘いものになっていった。

「私の自制心が、どこまで持つのか、試しているのでありますよ……。本当に、悪趣味で、最悪で……。ふう……」

「あ、あの……カルメンさん……。落ち着いてください……」

「……男性は、定期的に射精しなければ、余計な欲求が溜まると聞いております。ずっと一緒に捕らえられていましたから、溜まっているのですよね？」

「な、何を言ってる……」

「……私が玉袋の中が空っぽになるまで、抜いてあげるのです。赤く火照った顔をしたヴィルヘルミナは、手を悠二の下半身の上には伸ばさず。」

「つ、ちよ、ちよつと、カルメルさん、どこ触って……」

「男性器が、肥大しているのであります。このシチュエーションに興奮しているのでありますか？」

「興奮して……そんなこと……」

ヴィルヘルミナは、完全にスイッチが入っているらしく、ズボンの上に乗せた手を、上下に動かした。触れられた途端、悠二の脊髄に痺れるような快感の電流が走り抜けた。

「……では、あなたのを、見せてもらおうのであります」

「ああ、だから……だめだって……」

ヴィルヘルミナのピアニストのような繊細な指で、股間をまさ

ぐられる。ズボンのジッパーをおもむろに下げられ、下着の中に直接手が入ってくる。彼女の手は冷たかった。指先の動きにイチイチ反応してしまう。

「……ああ、ダメですよ、そんなの……」

「……出てきました。これが勃起時の男性器……初めて見ました……」ヴィルヘルミナは、剥き出しになった肉棒を、昆虫観察のようにマジマジと見つめる。「……随分とグロテスクな形をしているのでありますな。はあ……、しかも臭いがキツイのであります……。こんなに生臭いなんて……。チズーみたいな臭い……」

「そ、それは……」

ここに来て、一度も入浴していないのだから、汗や小便の臭いが濃いのは当然だ。

「では、清潔にするのであります」

「え……？ ふああつ！ な、なにしてるんですか……」

ヴィルヘルミナは剥き出しになった雄の象徴に、迷うことなく口をつける。亀頭の部分をレロレロと卑猥な音を立て、カリの部分に舌をくるくると回す。

「舌で、そんな……」

「んっ、ちゅぷう、あなたの性器を、んっ、きれいにしているの、あります。ちゅばあ、んちゅう、くちゅぷう……」

カリの裏側の部分に溜まっている恥垢を、刮げ落とすかのような動きだった。

「っ……、な、なにこれ……舌がヌルヌルして、それに何か、チクチクして……」

「んちゅぷう、洗浄の炎であります。んっ、ちゅぷう……、ふう、汚れをこうして燃やしな……するのですよ……」

「待ってください……。こんな風に刺激されたら……、うああ……」

……

悠二が身じろぎをする。粗末なベッドがギシギシと軋みをあげる。

快感が、うねるように身体の奥から沸き上がってきて、悠二の神経を痺れさせる。

「んっ、ちゅぷう……ちゅぷう……」

「ちよ、ちよつと……カルメルさん……、ああ……」

「ふう、はあ……あなたの……男性器は……んっ、随分と硬いですね……」

根元まで呑み込まれ、いいように吸い立てられた。どういうふうに頭を弄くられたのか、ヴィルヘルミナの目は、もう淫欲でいっぱいになった。

ヴィルヘルミナの動きは、ますます速くなり、刺激はひっきりなしにやってくる。悠二は身体を仰け反らせ、股間から沸き上がった悦楽の波に、翻弄され続ける。未だに女性の身体を知らない童貞の彼には、それはあまりにも刺激的すぎた。

「あつ、はあつ、ダメだよ、出る、出ちゃう……」

「……んちゅう、射精しそうですね？ では次の段階に移るのであります」

ヴィルヘルミナは唇を離す。ちゅばつというイヤらしい音がする。唇と破裂寸前の肉棒の間に、銀色の橋がかかる。普段気丈な顔を見せているあのヴィルヘルミナの口と、醜い性器にかかる糸。舐められるのと同じくらい蠱惑的な光景だった。

(まずい……めちやくちや……。興奮する……)

射精寸前まで追い込まれた肉棒は、もっと刺激が欲しいと反応していた。

「……んふう、ふう、もうパンパンに、腫れ上がっているの……」

りますな。射精、したいでありますか？」

「そ、それは……」

「では、こっちで射精させてあげるのです」

ヴィルヘルミナは、粉雪のように白く豊満な双丘を持ち上げた。醜い肉の塊が、左右から真っ白な肌に挟まれる。滑らかな肌は、じんわりと汗が滲んでいて、少しつるつるとした感触だった。何より特筆すべきは、そのやわらかさだ。ホイップされた生クリームが、肌の中に入っているのではないかと思うくらい、とてつもないやわらかさだった。

「では動かすのであります」

「うう、ああっ……」

ヴィルヘルミナは、両手で白い肉房をキュツと挟み込むと、上下に揺すり始めた。舌に比べて肌は抵抗が強く、快感もまどろっこしいものだった。しかし、巨乳に挟まれているという恍惚と、上目遣いでこちらを見上げる年上の女性の顔が、射精寸前のペニスに熱を灯していく。

「……んっ、少し抵抗が強いのであります」

ヴィルヘルミナは、口をくちゆくちゆと動かすと、亀頭の先端に唾液をたらししていく。肉棒全体が生温かくなり、根元が快感のために痙攣する。唾液がまぶされることによって、パイズリのヌメリはさらに大きくなった。駆けめぐる快感の波。出続ける脳内麻薬。悠二の指先がピクピクと震えた。

「んっ、これでどうでありますか？ んちゅう、ちゅぶうううー

——」

「あああ、そんなああっ……」

ヴィルヘルミナは舌を出すと、胸の谷間からひよこつと出てくる亀頭に、舌先をつける。鈴口をくすぐられ、舌が割れ目から内

部に侵入する。

耐えられるのはここまでだった。

「もう、だ、め……うああっ！」

どぶう、どびゅううう、どぶぶぶぶぶうううう！

「んっ、んぐう……」

玉袋に溜まっていた精子が、構造上あり得ないほどの速度で、尿道を通過する。そのときに沸き上がる甘美な射精感。びゆくびゆくと勢いよく噴き出た男の情欲は、美しいまつげを汚し、舌を出した口をも、淫らに汚していく。

ヴィルヘルミナはゆっくりと目を開けると、顔の前で手を皿のようにする。そこにポタポタと、熱い煮汁がこぼれていく。

「ふう、んんっ……」 感じたような声を漏らす。「これが精子でありますか……。ものすごく臭いものでもありますね。それになんだけ塊になってます。これは『濃い』というものでしょうか？」

真顔でそんなことを尋ねられても困ってしまう。しかし、実際それは数週間ぶりの射精だったため、とてつもない濃さだった。精子は彼女の言うとおりに、ほとんど塊で、汁というよりはゲル状の固形物だった。

ヴィルヘルミナはそれを十分に観察した後、手のひらに載った精子に、躊躇なく舌を伸ばす。

「ずずず……んっ、ちゅぶう、すごく苦い……。んっ……これが男性の精子の味……」

丁寧な舌を使って、舐めとっていく。

（カルメルさんが、僕の精子を……）

悠二の目には、その様子はたまらなく淫猥に映っていた。

「ふう、んんっ、ちゅぶう、こちらも、しっかりしておかねば……」

ヴィルヘルミナは亀頭に口を寄せると、そのまま大きく口を開けて啜え込んだ。

「っ、うあつ……」

唇の輪を縮めて、ギュツと根元を押さえつけると、頬をすぼめて急速バキューム。そのままの状態で顔をゆっくりと上げていった。

（うわあつ……尿道に残っていた分まで、ぜ、全部吸い取られちゃう……）

亀頭のところまで来ても、まだヴィルヘルミナは唇を放さず、ストローを吸うように、ちゅーちゅーと悠二の男汁を吸い立てた。

「これで、全部出たでありますか？」

「は、はあ……、ふうああつ……」

荒い息をついて、悠二はグツタリとベッドに横になった。本当にすごい射精だった。こんな快感は生まれて初めてだ。

「ん……、私のここも……、すごく……、濡れてきたのであります……。あなたのをしていたせいで、性的に興奮しているのであります……。あなたもまだ玉袋の中に、たくさん溜め込んでいるのでしょうか？」

ヴィルヘルミナはスカートを落として、悠二の上にまたがった。彼女の花びらは、まったく使い込んでいないらしく、少女のように閉ざされていた。淫猥なメイドは、そこを自分の指で押し広げた。サーモンピンクの淫裂が、目の前に現れる。彼女が言ったように大量の愛液で濡れそぼっている。初めて見るグロテスクな淫裂。だがその卑猥さが、ますます童貞心を興奮させていく。

「……んっ、では、いくのであります」

「待つてください。僕は、初めてで……」

「……それは私でもあります」

ふわりと彼女は微笑んだ。

「え、それじゃ……んんっ、うあああつ！ カルメルさん……っ！」

ゆっくりと腰が落ちていく。いわゆる騎乗位の体勢だ。瑞々しく濡れた女性器が、亀頭の先端に触れる。ずるり、ずるりい——。

悠二のものが神聖な女性の園の中に入っていく。

「つつ……こ、これは……つつ……」

彼女は頬を赤く染め上げ、痛みのためか目尻に涙の玉を浮かべていた。

「ふっ……はっ……んっ……」

ヴィルヘルミナの膣道は、凶悪なまでに硬かった。鍛えられないせいもあり、筋肉による締め付けもとても強く強い。

「ああああつっ！」

剛直がずるずると膣内に埋まっていく。

「んんっ、硬い、すごい……」

ヴィルヘルミナは全身を強ばらせ、膣全体でギュウギュウとペニスを締め付ける。温かいおしぼりで、男根を包まれたような温もりだった。膣全体はしとしとの汁で覆われている。内部は無数のヒダがあり、その1つ1つが悠二の中枢神経に、官能の針を突きつけていた。

「うごく……で、ありますよ……」

ずう、ずずずずう——。

ぎこちなくヴィルヘルミナの腰が動き始める。動きそのものは緩慢なものだったが、内部の肉の動きは半端じゃない。筋肉が精子を搾り取るように、ぐにぐにと動き続けている。

与えられ続ける官能。

の中で例えようもないほど大きな征服欲が、急速に満たされつつあった。

こうなったら、最後の最後までいきたい。なし崩し的に訪れた状況だが、この美しい女性を、徹底的に犯し尽くしたいという原始的な衝動が、悠二の全身を駆け抜けた。

腰の動きを、限界まで上げていく。

「ふう、ああっ……」

若さによってツンと上に向いた豊乳は、上下にたゆんたゆんといやらしく揺れる。その高低差は迫力満点だった。激しい性感を受けて、まず乳輪の部分が赤くなり少し隆起する。しばらくすると、それに押し出されるようにして、乳首全体がツンと尖っていく。

悠二は、淫靡に変形を続ける乳房を、驚掴みにした。

「ふあ、なにを——」

「……カルメルさん。紅世の徒に見られてるかもしれないのに、感じてるんですか？」

「え……はっ、……ふう、んんっ……」

「フレイルムヘイズなのに、こんな情けない格好して……。それで感じちやってるんですか？」

「んんっ、あ、そんなダメ……」

彼女の肌はさらに赤身を帯び、肌から大量の汗が噴き出していく。女性特有のフェロモンのような臭いが、独房に広がっていく。膣からとろりと流れた煮汁は、女の黒い樹林を朝露のように濡らし、悠二の腹の上にもこぼれていく。

「もし、こんな姿、シャナが見たら……、どう思うでしょうね……」

「……」

「んんっ、それは……」

「きつと軽蔑されちゃうんじゃないですか……？」

「はっ、んんっ、ふああっ……。だめえ、あの方のことは、言わないで。……わたし、私……もうっ、んんっ……はっ、ああっ……」

「イくんですか？ カルメルさん？」

「はっ、ふああっ、ああっ……」

ヴィルヘルミナの身体が大きく震え、電気信号を狂わされたかのように膣が痙攣する。熱さを増す肉壁が、血液で充実した男根を、幾重にも締め付ける。二〇〇発の弾丸を叩き込まれたような衝撃が、頭の中に走り抜ける。ピリピリと背筋が震える。

「僕も、もう——」

ぐつと腰を押しつけ、膣の奥に擦りつけるように突きだした。

「ふう、ふあああああっっっ！！」

若い男性器が脈打ち、素のまままで出せば天井まで届くほどの勢いで射精する。

膣内射精。

びくうびくうと太い剛直が震え、熱い性の飛沫が、一度も男で汚れたことのない神聖な場所を、端の端から蹂躪する。勢いよく子宮の壁にぶつかり、膣が精子で満たされていく。肉棒に生ぬるい感覚が広がり、彼は肉の歓びに身を震わせる。

「ふう、んんっ、はっ……ふあああ……はっ……」

ヴィルヘルミナは目をとろけさせいた。快楽に身体を支配されていた豊麗な女体が、びくびくと痙攣している。

今まで味わったことのない絶頂に到達し、やがて頭を悠二の胸の上に落とす。

「はあ……。はあ……」悠二は荒い息をつく。「すごかったですよ……カルメルさん……」

「はあ、まだ……、まだであります……」

ヴィルヘルミナは悠二の顔を掴むと、再び腰を揺すり始めた。

「え？　ちよ、ちよつと……カルメルさん？」

「もつと……もつとするのであります……。こんなんじゃ、全然足りないであります……」

ヴィルヘルミナの尻からは、白い男汁と赤々とした処女血が混じった液体が、こぼこぼとこぼれていた。

◇ ◆ ◆ ◆ ◇

——ツスウウンツ

大地が揺れる。

城の様子がおかしい。床が揺れ、壁の向こうでは、見張りが騒ぎ出している。なにやら慌ただしくなってきたようだった。

「……カルメンさん？　どうやらシャナが助けに来てくれたみたいだよ」

「ふう、んつ、はつ、ああっ……」

声をかけたにも関わらず、ヴィルヘルミナは淫猥な声を漏らすだけだった。

くちゅくちゅ——

淫猥な水音が、牢屋の中に鳴り響いている。もう何度出したのか分からない。ヴィルヘルミナの淫肉は、ぐしよぐしよに濡れそぼり、さらに感度を増していくようだった。

「はあ、んんつ、さかい、ゆうじい……ふう、ふああっ……」

ヴィルヘルミナは、すっかり潤んだ瞳で、こちらを見上げていた。

「どうするの……？　こんなところ見られたら、困るよ？」

「ふう、んんつ、困る……。困るので、あります……ふうああっ！」

「やめないの？」

「ふあっ、ダメ……。今止められたら……」

ヴィルヘルミナは頬を赤らめて、腰を動かし続ける。新しい快感の波が訪れる。

「ふう、ふああっ、あああっつっ！」

ヴィルヘルミナは、激しい絶頂に到達した。

一方の悠二のほうも、目がとろけきっていた。彼の頭の中も、度重なるヴィルヘルミナとの行為によつて、今や淫欲で満たされているからだ。

2人は獣のように混じり合い続ける。

それからどれだけ経っただろうか？

誰かが扉を開けたようだった。

続いて悲鳴が聞こえてきたけれど、それでもまだ2人は、交わるのを止めなかった。

同人誌の売り方とアニメの第2期。

なんだかんだ言って、シャナのアニメも二期に突入する。

最近はこういう手法も増えてきている……というか、かなり主流になっているような気がする。人気が出たら続編制作。クオリティーと時間問題を考えると、正しい選択なのでしょう。大抵の場合、一期よりも二期のほうがクオリティーが高いことが多い。「ARIA」とかも「げんしけん2」とかもそうだし。ときどき「ゼロの使い魔」とか、変に外してしまうことがあるけれど、それでもまあ、同じスタッフが関わっているなら、おおよそ二期目のアニメ作品の安定性は抜群に高い。

このことは同人誌作りと無関係ではないのです。

同人誌を作っていて、一番悩ましいのは、次のコミケが始まる頃に、一体何が旬になっているのか予測できないこと。ジャンルを決めるのが1ヵ月前なら別にいいのだけど、サークルカットは、半年前に書かないといけないのである。

外周の大手サークルなら、適当なイラストのつけてれば、ジャンルなんて気にしなくていいんだろうけど、うちみたいな中小サークルだと、やっぱりジャンル選びは、かなり重要になってくる。

どうせだったら旬の作品が作りたい。旬の作品は売れ行が全然違うし、旬の過ぎた作品は、作成するときに、モチベーションが下がる傾向がある。

絶対書きたい！ みたいな作品がない場合は、旬は考えないといけない要素である。

そんなわけで半年前に、どう予想するかである。

はっきり言って、半年前に初音ミクを予測することは不可能。

用意するのはアニメの放送予定表とゲームの発売予定表。

そこから12月に流行するだろう作品を予測します。

ちなみに八月の段階で鉄板と予想していたのが、ガンダムOO。出せば確実に踏んでいました。しかし八月の段階では女性キャラの紹介がない。なのでなくなく候補外。

つづいて「キミキス」「こどもの時間」「シャナ」「ToHaert2AD」と続きます。

こういうラインナップもあって、よくよく考えた結果。

アニメの第2期で、外れがまずない「シャナ」に収まったのでした。

12月の段階では、「こどもの時間」大暴投、「キミキス」普通。「ToHaert2AD」発売延期。なので、「シャナ」というのは選択肢としては、賢かったように思います。

シャナを押した金丸くん、グッジョブですね。

同人誌の作品選びというのも、意外と難しいものなのです。みなさんにも分かってもらいたいものですね。

そんなわけで、来年の8月になにが来るのか？ もちろんもう予想しています。

ハルヒ、コードギアスの第2期がほぼ鉄板でしょう。ハルヒが13話になったらキツイですけど、コードギアスは25話確定なので、コミケシーズンはクライマックス直前！ 最高にいい時期です。

第2期作品と同人誌の作りは、案外関係しているものなのです。

これを読んだ人は、次のコミケに何が来るのか、予想してみるのもおもしろいかも知れませんよ？

さて、それでは今日はこの辺で——。

(文：わーにんぐ)

後書き対談に代えて

どもどもー。わーにんぐです。みなさま。いかがお過ごしでしょうか？

私は、もうそりや大変なくらいの、年末進行を送っております。人生は大変だと申しませうか、貧乏人に暇はなしと言いますか、朝から晩までどこか夜中まで、書いて書いて書きまくるといふ、物書きとしては嬉しいやら悲しいやら、ふう、やれやれ、たまには休みも欲しいなあ、という生活を送っております。まあ、それなりに充実していたりするんでしようけど、たまには息抜きも必要だということ、こうして同人誌を書いていたりするわけです。酒に向かい酒みたいなお話ですけどね。

最近はずっと時間が自由に使えなくなっているの、時間の使い方にはいろいろと注意をしたりします。結局のところ、全部をやらうとするから、時間が足らなくなるのであつて、やることすべてに優先順位を付けて、それでこなしていけば、なんだかんだ言いながら、一日に本一冊くらいは読めたりしますからね。時間を作ると言うことは、いかに優先順位を決めるのかということに、他なりません。同人作業というのは、

接触した面と面とすり抜けるようなそんな高度なテクがいる作業なんだなあ、と、改めて思ったりします。

いや、本当によく完成したもんだ。

で、本題のシャナの話。今期のアニメ版はOPにやたらと気合が入りますよな。OPのクオリティ高いと、作業するモチベーションつてぐぐつと上がるところです。炎髪表現とか、すごい好きなんですよね。ああいうのは、考えた人凄いなーと心底思う。

一期も二期もアニメ版は欠かさず見ている私ですが、「釘宮理恵」のファンである。もうなんかそれだけで、すべてを語っている気がします。もうね。久しぶりに、ライブとか行きたくなつてしまいました。いつ行つてしまおうかと。時間ないけど、でも行こうかと……。そんなことを思わされてしまいました。この本が出ている頃には、私も遊びほうけていたりするんですかねー。うーん、だつたらいいなあー。さて、諸処戯れ言まみれになつてしまいました。今回はこのあたりで。次は夏にお会いしましょう。

(文：わーにんぐ)

こんにちは。金丸です。

今回はシャナなエッチなお話ですが、いかがでしたでしょうか？

エロ漫画はやっぱり難しいですね。いいものを作ろうと、毎回苦心しているんですけど、なかなか自分の合格ラインに到達できません。後から見返すと、割とトホホな感じ。今回こそ、トーンをバリバリ張る予定だったんですが、またしてもタイムアップ。はあ、毎回白くてすみません。

ああ、せめて締め切り前の土日に、甥っ子が遊びに来なければ……。

だけど、これはこれで全力を持って書いた作品ですので、楽しんでいただけると嬉しいです。

最近はずっと本も順調に売れてきてますし、この調子で販売冊数を伸ばしていきたいものです。買ってくれた人、これからも応援よろしくお願いします。今度は夏コミでお会いしましょう。では。

(文：金丸)

■ Okuduke

The Write Warning & Kanemaru
Incandescent x Deluxe

Print : kurieisya

Plassent by Sakuraminto

Comic Maket 73 2007/12/31
<http://www.sakuaminto.com/>



桜眠都